

婚の意味を問う』パートⅡ 現代社会における結婚の意味を問う」と題されたシンポジウムが行われた。学問分野の性格上、人口に関連する報告は多かったが、日本人口学会会員によるものとしてはテーマセッションを含むそれぞれ別のセッションで以下の5報告があり、シンポジウムでは落合恵美子会員が「歴史的に見た日本の結婚」と題する報告を行った。

日本と韓国のシルバー人材活用—派遣事業から創業支援まで— 山地久美子（神戸大学大学院）
シンガポールにおける出生・家族政策と出生力の関係 小島 宏（国立社会保障・人口問題研究所）
「直系家族制から夫婦家族制へ」は本当か（テーマセッション A）

戦後日本の家族変動—「戦後日本の家族の歩み」調査から— 加藤彰彦（帝京大学）
社会的ネットワークの構造と力—育児におけるネットワークのサポート効果
松田茂樹（第一生命経済研究所）

現代女性の離家規定要因—『消費生活に関するパネルデータ』を用いた分析—
福田節也（明治大学大学院）

なお、2004年大会は清水浩昭会員により9月11日（土）～12日（日）に日本大学文理学部で開催される予定である。

（小島 宏記）

環境科学会2003年会

社団法人環境科学会2003年会は、2003年9月11日（木）・12日（金）、東京大学駒場キャンパスにおいて開催され、一般講演、シンポジウム、ポスターセッションが行われた。

一般講演のうち人口学的観点から特に興味深いものとしては次の3つがあげられる（発表順、○印は発表者）。

「化学工業原料およびエネルギー資源としてのバイオマスの供給可能性のモデル分析」

○棟居洋介（東京工業大学大学院）

「GISおよびデータマイニングを用いた呼吸器系疾患の環境リスク要因解明に関する研究」

○安納住子（芝浦工業大学）

「国際交易と土地利用変化」

○松村寛一郎（関西学院大学）・Guoxin TAN・柴崎亮介

棟居氏、松村氏の発表は、それぞれバイオマス、食料についての分析であり、いずれも将来の人口をシナリオとする世界モデルを用いたものであったが、後者では都市人口のシナリオにも注意が払われていた。安納氏は、研究対象地域（東京都心）をセルで分割することによって、呼吸器系疾患の患者の空間的な分布をデータ化し、環境要因との関係を探っていた。

また、これらの一般講演のそれぞれについて質疑応答が行われた。（今井博之記）

アジア HIV 流行モデルを用いた政策分析ワークショップ

タイ国保健省、米国東西センター、家族保健インターナショナル（FHI）によって開催された「ア

ジア HIV 流行モデルを用いた政策分析研修ワークショップ」に参加した。このワークショップは、SARS 流行のために当初の予定から7月に延期され、21日から25日にかけてバンコクのマヒドン大学において実施された。このワークショップでは、タイとカンボジアで HIV 流行の将来推計のために使用されてきたモデルについて紹介され、データ収集・分析・統合や、適切なモデルの開発、モデルの公共政策への応用、といった過程が概観され、討議された。(小松隆一記)

国際統計協会 (ISI) 第54回大会

最古の国際学会の一つと言われる国際統計協会 (International Statistical Institute) 第54回大会が2003年8月13~20日にドイツ連邦共和国ベルリン市の国際会議センター (ICC) で開催された。プログラム委員長は Susan Linacre オーストラリア統計庁次官 (人口統計担当) で、現地組織委員長は Hans Günther Merk ドイツ連邦統計庁長官で、実際の運営は同庁が中心となって行われた。2400人余りの参加者のうちで日本人参加者は130名近くに上り、500名あまりを占めるドイツ人を別とすれば、第1位で200名弱の米国人に次ぎ、ヨーロッパの主要国からの参加者数を若干上回った。日本人口学会会員の参加者は石 南國 (城西大学)、稲垣誠一 (農業年金基金)、大林千一 (総務省)、三浦由己 (駿河台大学)、小島の5名であった。今回はプログラム委員長のおかげか、前回と比べて諸外国の人口学者の参加が多かったが、関連セッションが比較的多かったことにもよると思われる。

約2百のセッションで千近い報告が行われたが、統計学という分野の性格上、人口に関連するセッションは少なくなかった。そのうち、招待論文セッションで人口を冠したものは“IPM-34: Surveys of Special Populations”, “IPM-66: New Approaches to Population Censuses” (a special memorial to Leslie Kish), “IPM-78: Statistical Aspects of Projecting Populations” の3つがあり、他に人口移動に関する“IPM-43: Impact of Migration on Urban Areas”があった。IPM-66では国際人口学会会員の Paul Cheung シンガポール統計局長が討論者を務め、IPM-78では稲垣・松田芳夫 (東京経済大学) が連名で“Population and Socio-Economic Structure Simulation Using Micro Data”を報告したが、このセッションは Wolfgang Lutz (IIASA) が組織し、Joshua R. Goldstein (Princeton University) も報告した。また、人口をテーマとしていなかったが、“IMP-86: Meeting Changing Policy in the Asian Region—NSO Perspectives”では人口学会会員の大林統計基準部長が“New Directions in Development of Government Statistical Services in Japan”, 韓国人口学会副会長の Doo-Sub Kim 漢陽大学教授が韓国人口高齢化について報告した。

寄稿論文セッションとしては“CPM-056-1: Population Statistics I”, “CPM-051-2: Population Statistics II”, “CPM-102-1: Demographic Challenges in the 21st Century” の3つがあった。CPM-056-1では小島が“Determinants of Attitudes toward Children in Japan”, 韓国統計庁の Hyung-Seog Kim が人口センサス集計データのスケール、Insook Jeong が韓国の出生率低下について報告した。CPM-102-1は大会直前に Charlotte Höhn ドイツ連邦人口研究所長によって組織され、Dirk J. van de Kaa オランダ学際人口研究所元所長、Lutz 国際応用システム分析研究所研究部長、Joseph Chamie 国連人口部長が報告し、Paul Demeny ポピュレーション・カウンシル特命研究部長が討論者を務めるという人口研究の大家による豪華なセッションであった。CPM-056-1と同時に開催されたため、残念ながら出席できなかったが、人口に興味をもつ聴衆が集中したようである。

なお、小島は8月18日にロストックのマックスプランク人口研究所を訪問し、Gerda Neyer 博士を組織者、在外研究中の廣嶋清志・島根大学教授を座長として“Determinants of Attitudes toward Children: A Comparative Analysis of the JGSS-2000/2001 and the Taiwan Social Change Survey